香川県農業試験場研究報告　第 4 号（1958 年 4 月）　1-10

秋馬鈴薯生育相追跡に関する研究

太田勝美・宮脇弘三

１．秋馬鈴薯を合理的に肥培管理するためにはその生育経過を悉知する必要があるので昭和 30, 31, 32 年に亘って農林 1 号主体に生育相の追跡調査を行ったものである。

２．農林 1 号の地上けいは 10 月初旬を起点として急速に繁茂し, 11 月初旬草丈の仲長最高に達したときけい葉重が最大となる。爾後気温の急降によってけい葉枯する。匐枝は 9 月下旬地下各節より発生し I0 月下旬略最高となる匐枝の薯転移は 10 月初旬の C20°内外より始め 10 月中一下旬の C16-17°, 地上けいの繁茂最盛期頃から薯が急速に肥大, 12 月上旬 C7-8°には殆んど収量を構成する。特に 11 月上旬から 12 月上旬にかけての短日, 低温下において薯の肥大顕著である。

３．品種間における生育量は特性によって可成り異なるが所謂生育相は概ね農林 1 号と同じ傾向を認めた。

４．植付期が早い程萌芽期は早いが, 萌芽日数を要する。けい葉重は植付期がおくれるにつれて軽く, 殊に 9 月中旬以後になると草丈低く地上節数少く, くき細く, 甚だ貧弱である。

５．植付期と耐霜性は降霜当時の草勢の強弱によって異り, 早植, 老化, 黄変したものが耐霜性弱く, けい葉に活力あるものが強い。けい葉は薯肥大最盛期に入る 10 月中一下旬頃迄に充分繁茂させ同化作用を旺盛にする。けい葉の早期, 黄変, 老化は収量に極めて影響する。

６. 早植は薯転移並びに肥大始期が早いが, 高温のため肥大緩慢 10 月中-下旬頃の C16-17°の気温状態になって急激に肥大する。晩植は勿論薯形成, 肥大期がおくれるが, この気温下に入ると同化養分の移行蓄積量に応じて肥大する。けい葉重も低いので薯の肥大量は劣る。

７. 11 月上旬の早堀は 8 月下旬植付が多収で上薯比率が高いがけい葉枯凋後の 12 月中旬収穫においては特別な早植よりも 9 月初旬植付が多収を示し上薯収量が多い。9 月 10 日以後の晩植では経済的収量を挙げる事が困難である。